

総選挙は終わった。 さあ、どうする？

今回の総選挙とは？

今回の総選挙の結果は激動、驚きという感情がわき上がり、私たちの理解を上回り、頭が追いつかないというのが率直な気持ちです。自民党が316議席、一つの政党が衆院の3分の2以上になるのは戦後初です。争点は高市首相への評価で、主流派を選ぶことが現状維持になると判断された方が多かったのかもしれませんが。背景には、「世代間の政治認識の断層」が可視化された選挙と言えます。特に若年層の投票行動は従来の分析枠組みでは説明できず、多くの観測者に違和感を与えました。若者の政治認識は、理念的対立よりも「機能評価」に近いです。すなわち、「どの立場か」ではなく「機能するかどうか」が判断基準です。雇用、物価、社会保障、安全保障といった生活に直結する問題への関心の高さは、この傾向を示しています。これは政治的無関心というより、むしろ実利的な政治観の表れと言えます。さらに情報環境の変化です。若年層は政治情報をSNSや動画プラットフォームで取得し、そこでは政治は「論争」ではなく「物語」や「人格」として流通します。結果的に、政策の細部よりも、発信者の一貫性や言葉の明確さ、人物像の分かりやすさが評価軸となります。今回の高市首相への強い支持は、この情報構造の影響が強く見受けられます。

中道改革連合などの「リベラル」はなぜ負けたのか？

中道の大敗は「動員構造と高齢化による硬直化」の問題だと思います。昨年12月の産経新聞とFNNの合同調査で立民の18~29歳までの支持率が「0%」と出ました。この若年層の政治参加を理解するうえで重要なのは、政治がいわゆる「押し文化」と接続している点です。押し文化とは、政策的完全一致を前提とせず、「この人なら信じられる」「応援したい」という感情的信頼を基盤とする支持形態です。この構造では、一貫した姿勢や発信の透明性が重視されます。特に若者は「言葉と行動が一致しているかどうか」に敏感です。従来型政治が持っていた組織や権威による信頼性が弱まり、「可視化された誠実さ」が新たな信頼資本として機能し始めています。この現象は単純な右傾化ではありません。若年層は特定の思想への移動ではなく、「左右の座標系自体から離脱した」と捉える方が実態に近いです。分かりやすく、機能しそうに見えるものを選択するという、新しい評価軸が形成されているのです。短尺情報が支配的な現代では抽象度の高い言葉ほど伝達効率が低下します。政治が短い言葉で理解される時代では、「何をするのか」が一言で伝わらない概念は構造的に不利になります。これは政治家個人の能力ではなく、情報環境の変化による構造的転換です。今は臥薪嘗胆のフェーズと考えるのが現実的です。次回選挙のために「1ヶ月1万円支援してくれる人を50人確保する」を中道の方々はやった方が良いと思います。大敗して金や権力目当ての人は来ないというメリットがあります。この50人は絶対離れない味方になる可能性があります。中道の落選議員全員が50人味方を確保できたら、50人×123人で6,150人の強い味方が爆誕!!流行りに流されにくい人を6,000人超確保できたらかなり希望が持てそうです。

私たちがこれから作っていくものは

ただ、このままでは来年の統一地方選挙はもっと焼け野原になります。そこが私たちに問われていることではないでしょうか？ これからの方向性は三点に整理できます。第一に、「可視化された誠実さ」の積み上げです。政策の正しさだけでなく、意思決定過程や活動ログの公開が不可欠になります。信頼は主張ではなく記録によって作られる時代です。第二に、「生活言語への翻訳」です。専門的政策をそのまま訴えるのではなく、市民の生活単位で語り直す能力が重要です。若年層には、「あなたの生活がどう変わるのか」という具体性が説得力を持ちます。第三に、「継続可能な関係性の構築」です。選挙中だけの動員型政治ではなく、日常的な接触から信頼を醸成する政治文化が必要です。これは効率性ではなく持続性を重視するアプローチであり、地方政治が本来持っていた価値の再発見でしょう。「印象から実証へ」、「感覚から記録」へと信頼を再構築する営みは、地方から始められます。小さな実践の積み重ねが、次の時代の政治文化の基盤を形づくっていくのではないのでしょうか。地元を通して生きやすい社会を目指すことが、いつか国政にも届くと願っています。

私たちはこうする!

はじめまして チーム・パシュートです

チーム・パシュートは、埼玉県東部を中心に活動する対話型コミュニティです。

私たちは、日々の暮らしと政治は本来つながっているものだと考えています。

政治の話は難しくなりがちですが、

本当は「これってどうなっているんだろう？」という素朴な疑問から始まるもの。

そんな小さな問いを持ち寄り、安心して話し合える場をつくることを大切にしています。

情報共有や地域活動、社会的なテーマの対話、そして必要に応じた政治的なアクションまで。

誰かが先導するのではなく、並走する関係の中で、

一人ひとりが自分の言葉で社会を考えられる状態を育てていきます。

正解を押しつけるのではなく、問いを持ち帰れる場を。

チーム・パシュートは、ゆるやかにつながりながら、社会と関わり続ける集まりです。

こんな人がメンバーです

チーム・パシュートのメンバーは多様性にあふれています。

一人ひとり、できることもやりたいことも違っていても一緒に活動しています。そんなメンバーを少しずつご紹介。まずは、なんとなく「事務局」的なポジションにいる人です。

吉田りこ

毎朝、白川ひでつぐ市議会議員と一緒に駅頭をはじめて3年が過ぎました。（白川議員は23年目）普段は企業組合という珍しい形式の法人と、一般社団法人を経営。越谷では大袋に「ガヤChill.」というコミュニティ・スペースを開いていて、宴会料理と、スマホ何でも相談の担当をしています。

社会活動での興味関心は、人権について、教育について、ITの活用について。特に子供とネットとの関わりについては、10年以上県内の小中学校（たまに高校）で直接子どもたちや保護者の方にお話しをしたり、公民館などで地域に向けてお話しをしています。越谷市内の小中学校にも伺っているので、見かけたらお気軽に声をかけてください！

趣味は料理、手芸、読書、観劇。おとなしそうな趣味ですが、実際はとてもアクティブで、周囲の人たちからはワーカーホリックと言われています。

